

武蔵学園で目撃された仔を啜えたハクビシンと 2024 年前後に観察された昼間の活動および駆除の記録

白井 亮久
(生物科)

要 旨

2024 年 9 月、東京都練馬区にある武蔵学園の構内において、仔を啜えたハクビシン成獣が日中に目撃された。多数の生徒や教職員がこの様子を目撃し、写真や動画による記録が得られた。夜行性のハクビシンの日中の行動の知見は少なく、本報告ではこの目撃事例の詳細と、構内で日中に観察されたハクビシンの行動を紹介する。それらに加え 2016 年から 2025 年初旬の学内建物への侵入および駆除の記録をまとめた。

Keywords: 生き物地図, 都市生態系, 中型哺乳類, 繁殖行動, 屋内侵入, センサーカメラ

はじめに

武蔵学園は、東京都練馬区に位置する広さ約 7.8 ヘクタールの教育施設で、大学と中高一貫校の校舎が同一敷地内に設置されている。学園の中央部には人工的に整備された濯川が流れ、敷地や川の周囲は樹木に覆われており、都市部でありながら多様な野生生物の生息環境を形成している。

これまで学園内ではタヌキ *Nyctereutes procyonoides*、ハクビシン *Paguma larvata*、アライグマ *Procyon lotor* などの中型哺乳類の目撃が報告されている（白井, 2020 ; 2024）。とりわけ、タヌキについては生態学的な知見が既に蓄積されており（白井, 2017 ; 飯島ほか, 2018）、構内での出現状況や行動がある程度明らかになっている。一方ハクビシンは、タヌキと並び構内での目撃頻度が高い動物であるにも関わらず、学園内での生態的な知見は限られており、2018 年頃に生物部により実施された予備的な糞調査で、構内に自生するイチヨウなどの樹木の種子や昆虫類が確認された程度に留まっている。

2024 年秋、構内において親とみられるハクビシンが仔を啜えて移動する姿が、日中、多くの人に目撃され、写真および動画による記録が残された。通常夜行性といわれるハクビシンの昼間の行動についての知見は少ない。本報告は、この事例の詳細を紹介するとともに、2024 年前後（おおむね 2024 年 3 月–2025 年 6 月）に学内で日中に得られたハクビシン

の目撃情報や、2016–2025 年に屋内に侵入して捕獲・駆除された事例をまとめ、都市部におけるハクビシンの生息状況の一端を明らかにするものである。

1. ハクビシン

ハクビシンは食肉目ジャコウネコ科に属す全長 90–110cm、体重 3–4kg ほどの中型哺乳類である。外見的特徴として、黒い顔面に明瞭な白色の縦筋を有し、タヌキやアライグマに比べて体高が低く、全長の半分近い長い尾を持つ点が挙げられる（古谷，2009）。これらの特徴により、学園構内で目撃される他の哺乳類（タヌキ、アライグマ）と比較的容易に識別可能である。ハクビシンは木登りが得意で、垂直な壁面も登ることができる。実際に学園周辺では、電線上を歩く姿が通学中の生徒によって目撃されることもある。食性は主に果実を好むとされるが、実際には雑食性であり、昆虫、小動物、植物質など多様なものも摂取する（増田，2024）。

日本におけるハクビシンは、かつて在来種か外来種かの議論がなされていたが、現在では東南アジアや台湾を原産とする外来種とされている（増田，2024）。東京都内では、1980 年 3 月に八王子市で初めて確認された（金井，1989）。練馬区においては 2012 年頃から交通事故（ロードキル）による死体の報告が急増している（白井，2017）。これは、同区内での個体数の増加を反映していると考えられ、実際に武蔵学園内の警備員や旧教職員からの目撃情報が得られており、その時期と一致する（旧教職員の故・高江洲瑩による私信；施設課調べ）。

また、ハクビシンは樹上性の傾向が強く、屋根裏などの人家や建物内への侵入や営巣があり注視されている（増田，2024）。武蔵学園においても、目撃件数の増加および建物の天井裏に営巣、騒音や糞尿による被害が生じているため、2015 年 12 月頃から施設課により屋内外に箱罠が設置されるなど、対策が講じられている（施設課，私信；白井，2018）。

2. 仔を咥えたハクビシンの目撃事例

2024 年 9 月 17 日(火)、午前 10 時 20 分頃、武蔵学園東門近くの百葉箱付近において、成獣のハクビシンが仔を咥えて移動している様子が目撃された（図 1）。この時間帯は中休みにあたるため、大学・中高の生徒や教職員など多数の目撃者があり、複数の写真および動画による記録が得られた。それらの情報を集約し、以下に示す。

最初の目撃は大学 11 号館前テラスにいた生徒によるもので、ハクビシンが東門付近の茂みから出現し、仔を咥え直しながら百葉箱の方へ移動する姿が観察された（図 1D、渡辺創介による撮影動画 <https://youtu.be/IwIRmvj87DU>）。この個体は、東門付近の民家など学外から侵入してきた可能性も考えられる。



図 1. 仔を咥えて移動するハクビシン（2024 年 9 月 19 日，中休みの 10 時 20 分頃）。（撮影．A・C 丸山琥太郎，B・E 片倉景道，D 渡辺創介）。



図 2. テニスコートそばでサッカー一部の部員が見かけたハクビシンの親子。フェンスの上に親、地面に仔が 3 匹いた（2024 年 9 月 26 日 6 時 17 分。撮影：数原 兜）

百葉箱付近では複数回にわたる「咥え直し」の様子が確認され、仔ハクビシンはあまり動かないが、生存しているように見られた（図 1C）。周囲には多数の生徒や教職員がいたが（図 1B）、成獣のハクビシンはやや警戒しつつも移動を継続し、最終的にはテニスコート付近から広場を横断し、目撃していた生徒の合間を縫うように濯川方面に駆けていった。この一連の移動も中学 2 年の生徒により記録され、動画が残されている（図 1E、片倉景道による撮影動画 <https://youtu.be/tNu0D8EVPng>）。濯川下流部の茂みに入った後の個体の行動については確認されていない。

仔を咥えての移動行動に関しての詳細な文献情報はみつからず、営巣地の変更や巣立ちの補助といった「移動（いわゆる引っ越し）」行動の一環である可能性がある。なお、この個体と同一と推定される親子ハクビシンが、9 日後の 9 月 26 日にも目撃されている。この日は、体育祭の初日で朝練習に訪れていたサッカー部の複数の生徒により、下グラウンドに接するテニスコートのフェンス上に成獣 1 頭、地上に仔 3 頭が確認された（図 2）。

この 2 つの事例から、9 月中旬に親子ハクビシンが構内に出現・移動してきた可能性が高く、一定期間に渡って構内で活動していたことが示唆される。

3. 2024 年前後の武蔵学園内のハクビシンの目撃・観察

2024 年 4 月～2025 年 6 月にかけての、武蔵学園構内でのハクビシンについてまとめる。

3-1. センサーカメラによる観察

著者は 2016 年より施設課の許可を得て学園構内にセンサーカメラを設置し、中型哺乳類を中心とした動物の行動観察を行ってきた。2024 年度前後は、主に大学 9 号館裏の給水塔付近にカメラを設置し夜間を中心に撮影したところ、ハクビシンを含む、タヌキ・アライグマなどの複数の哺乳類の映像が記録された。詳細な映像記録および分析は現在整理中であるが、撮影された回数ではハクビシンとネズミが多く、次いで、タヌキ、アライグマだった（未発表）。その他の動物の興味深い行動として、アライグマが構造物に背中を押し当て、背中を搔く行動の様子も撮影された。同じ場所を複数の中型哺乳類が利用していることから、学園構内の特定の場所が、都市部に生息する野生動物にとって共通の移動ルート、あるいは利用場所となっている可能性が示唆される。

3-2. 大学 9 号館でのハクビシンの駆除事例

練馬区内では、2012 年頃よりハクビシンの交通事故（ロードキル）件数が急増しており（白井, 2017）、区内での個体数増加や、野生生物と人間との軋轢が生じていることが推測される。武蔵学園構内でも同様に、大学 9 号館では過去数年間にわたり、ハクビシンの屋

内侵入とそれに伴う糞尿や騒音などの被害がある（後述の図 4）。

2018 年 12 月 15 日には、大学 9 号館付近のタヌキのため糞場 MG-1 を調査中のセンサーカメラにより（白井，2018），建物脇の隙間から屋内に侵入するハクビシンが偶然撮影された（図 3：動画 https://youtu.be/kcqUuxwrQ_E）。この情報をもとに施設課が対応し侵入口は金属製部材により閉鎖されたが，建物の構造上の問題から他の箇所からの侵入が継続し，被害の完全な防止には至っていない。実際，それ以降も毎年のように屋内に入り込んだハクビシンの駆除が行われている（図 4；表 1）。なお駆除は金属製の箱罠で行われている。



図 3. A. 屋外から大学 9 号館に侵入するハクビシン，B. その場所の昼の様子（この後，隙間は金具でふさがれた） [2018 年 12 月 15 日 1 時 01 分撮影]

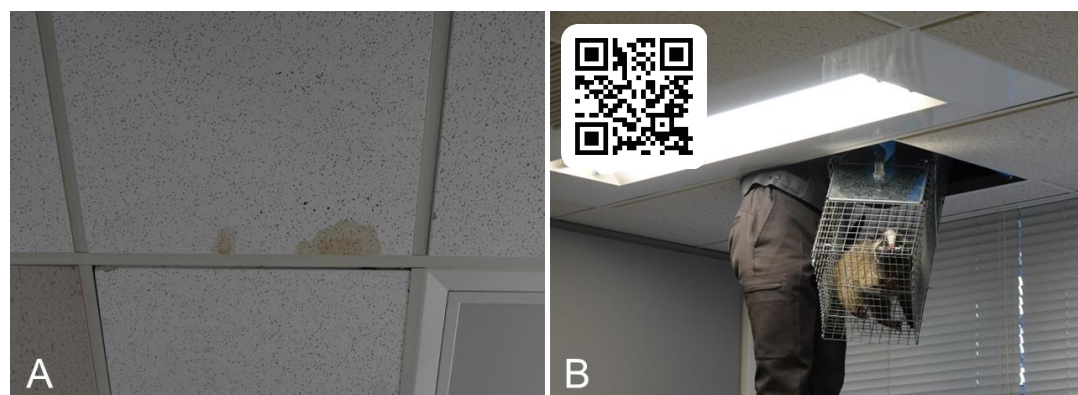


図 4. 大学 9 号館のハクビシンの被害と駆除（A. 天井に着いた糞尿の跡，B. 駆除の様子，QR コードは威嚇する様子： <https://youtu.be/bxY9q65uDFs>） [2023/2/14 撮影]

構内での目撃情報が増えた 2016 年頃から，屋内外で箱罠での駆除が行われている（図 4）。2025 年にかけて学内で捕獲された 22 個体を表 1 に示す。雄 11 個体，雌 6 個体，性別不明

3 個体、情報なし 2 個体で、雌より雄の方が明らかに多い。

表 1. 武蔵学園でのハクビシンの捕獲記録 (2016 年–2025 年) (予報)
(2018 年と 2019 年は著者調べ, その他は施設課・著者調べ)

年	駆除数	場所	備考
2016	4	屋内・屋外	オス(4)
2017	1	屋外	メス(1)
2018	1	屋外	
2019	1	屋外	
2020	4	屋内・屋外	オス(2), メス(1), 不明(1)。疥癬個体含む
2021	1	屋内	オス(1)
2022	1	屋内	オス(1)
2023	3	屋内	オス(1), 不明(2)
2024	5	屋内	オス(2), メス(3)。疥癬個体含む
2025	1	屋外	メス(1)

表 1 のうち体重が計測されている 17 個体の体重組成を図 5 に示す (2016–17 年と 2020–2025 年, 施設課調べ)。最大個体は 4.6kg であった (2021/03/17 捕獲, 雄個体)。体重が 2kg 以下の幼獣と, 成獣の数はそれほど変わらない。

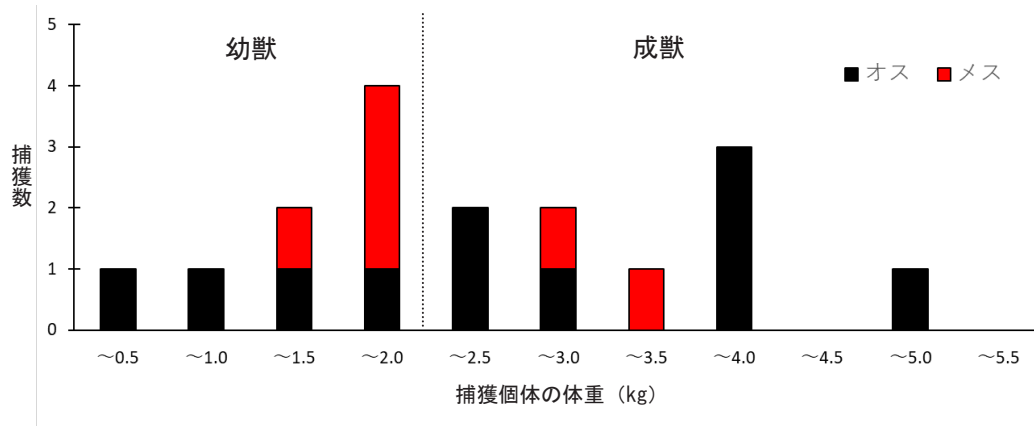


図 5. 捕獲されたハクビシン 17 個体の体重組成 (2016–17 年, 2020–25 年)

メス 6 個体, オス 11 個体. 便宜的に 0.5–2kg までを幼獣, 2kg 以上を成獣とした (幼獣は 8 個体, 成獣は 9 個体)

まだ整理中であるものの直近 2 年間の大学 9 号館での捕獲記録をみると, 2023 年 1–2 月に幼獣 3 個体, 2024 年 2 月末に幼獣 3 個体, 11 月に幼獣 2 個体が捕獲され, 前年(2024 年)までの 2 年間で秋から冬に計 8 個体の幼獣が駆除されている (未発表)。このように冬季の屋内での幼獣の捕獲事例が多く, 武蔵学園内での冬季の繁殖が示唆される。2025 年は屋内への侵入は確認されておらず, 2025 年 6 月時点での捕獲は屋外での 1 件のみである。

3-3. その他の日中の目撃情報

そのほか、2024年9月と2025年6月の日中に目撃された特に注目される事例を紹介する。今回の武蔵構内での目撃事例について、巻末の付図に示した。

スダジイ樹上での休息行動

2024年9月25日13時30分頃、大学3号館北側駐輪場付近のスダジイ樹上において、成獣のハクビシン1頭が休息している姿が確認された（図6：動画https://www.youtube.com/shorts/6hL-4_g9aek 撮影は池原満）。正門の守衛所付近で、多くの大学生および職員がその様子を観察している。

観察された個体は、高さ5mほどの樹上で口を開けてあくびのような行動をとった後、自身の体をなめるセルフグルーミング行動を示し、その後ゆっくりと垂直の幹を降りて地上へと移動した。タヌキとは異なり垂直壁でも上がることが可能なハクビシンであるが、下りる姿をみるのは初めてだった。降りる際に、尾がまっすぐになっていることが印象的だった。

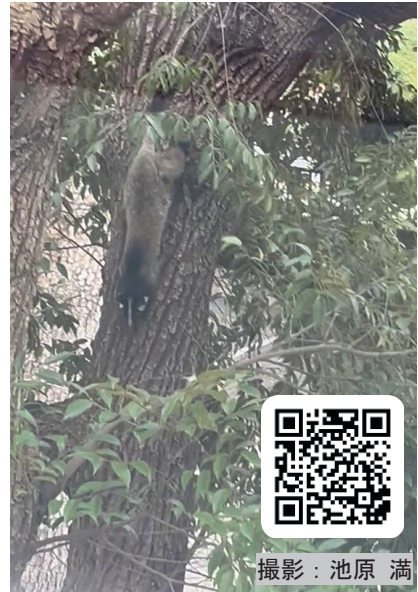


図 6. スダジイを垂直に下りる

妊娠個体とみられるメスの目撃

2025年6月2日午前9時39分頃、東門付近の百葉箱付近で、乳房が著しく発達したメスのハクビシンが目撃された（図7：川端拓信による撮影動画<https://youtu.be/LjveBcLLaUU>）。この個体は東門付近の民家の近くから出現した。前項2で取り上げた2024年9月に仔を啜えたハクビシンが目撃された場所と同所である。歩行時に、乳房が揺れるほど発達が見られたことから、授乳中あるいは妊娠後期である可能性が考えられる。通常、ハクビシンの雌雄は判別が難しいため（増田，2024）、メス個体とわかる貴重な記録である。なお以前、濯川沿いを歩く疥癬個体で陰囊が確認されたオスの報告もある（白井，2024の写真5）。

四季のない東南アジアを原産とするハクビシンは、年中繁殖可能とされているが、日本においては冬季に繁殖を停止している可能性が指摘されている（豊田，2012）。春から初夏に限られる短い繁殖期を持つタヌキよりは、ハクビシンの繁殖できる期間は長い。ただし、本種の都内における繁殖生態の研究は少なく、今回予報として示した表1の駆除のデータを整理し、知見の蓄積が望まれる。学内で駆除された個体サイズをみると、幼獣の捕獲は、初夏というよりは冬であることが多い（未発表）。これは冬季に屋内に営巣することと関係

するのかもしれない。

野上（2022）の金沢市の自動撮影カメラの調査によれば、ハクビシンが撮影されるのは主に 19 時から 4 時の夜間に限られ、複数地域の事例でも同様な傾向がみられることから、ハクビシンは完全夜行性としている。一方、都市部にある武蔵学園では、今回報告したようにハクビシンの昼行性の行動を観察することができた。今後も、知見を蓄積・記録していきたい。なお、野上（2022）では 6 月初旬の深夜に行われた野外での貴重な交尾行動を映像とともに報告している。

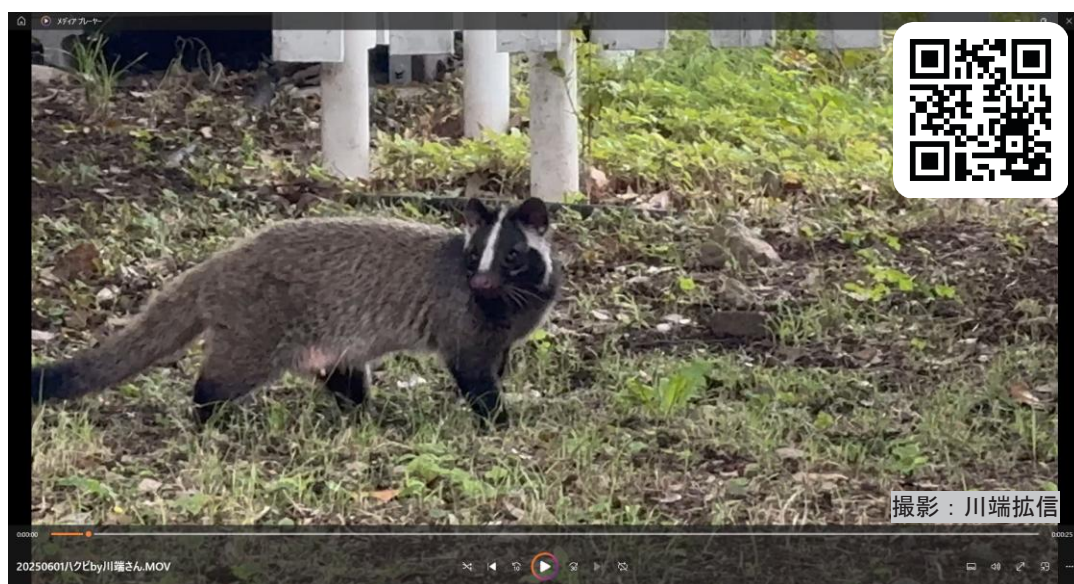


図 7. 乳房が発達した雌のハクビシン

（2025 年 6 月 2 日 9 時 39 分 東門の百葉箱付近. 撮影：川端拓信）

おわりに

ハクビシンは、タヌキと並んで武蔵学園に定着している中型食肉目哺乳類で、2018 年頃の生物部による糞分析では、昆虫片のほかイチョウ（ギンナン）やエノキの種子が確認されており、2017 年 6 月には大学 3 号館中庭のビワの木に登り果実を採食する様子も観察されている（白井，2017 の図版 6 の f）。これらのことから、季節によっては学園内で採食行動が完結している可能性が示唆され、学園内のタヌキと類似する生態的側面があると考えられる。

一方で、タヌキが主に排水管など地表近くを寝床にすることに対し、ハクビシンは樹上性傾向が強く、建物への侵入や天井裏で営巣することから人間生活との摩擦が生じやすい。特に屋内への侵入は衛生面・設備面での被害をもたらす（岩間，金子，2019），武蔵学園内

でハクシンと共生できているとは言い難い状況にある。

学園におけるハクビシンの食性・行動様式には未解明の点が多く、今後も継続的な観察・記録が必要である。また、都市部における野生生物との共存のあり方を考える上でも、本学園のような都市型キャンパスにおける知見の蓄積は重要であるといえる。

なお、武蔵学園の高中標本庫には、ハクビシンの骨格標本・剥製標本、内臓を含む液浸標本が保管されている。これらは 2016 年頃に中岡佳祐（90 期）ほか当時の生物部員らによって作成されたもので、動物の体を理解するためのものだけでなく、都市生態系や野生生物を考える上での教材として活用されている（図 8）。



図 8. 高中標本庫に保管されているハクビシン標本（手前から、剥製・液浸・骨格）をスケッチする生徒（2025 年 2 月 18 日，中 1 自然科学 A の授業風景）

謝辞

本報告における仔を咥えたハクビシンの映像・写真の提供にあたり，以下の方々に深く感謝申し上げる（学年はいずれも 2024 年度時点）。高校 3 年の丸山琥太郎と数原兜（99 期），高校 2 年の渡辺創介（100 期），中学 2 年の片倉景道（103 期）の各氏からは貴重な映像および写真の使用許可を頂いた。また，英語科の楠部与誠，中学 1 年・鈴木新大（104 期）の両氏からも貴重な目撃情報を教えて頂いた。2025 年 6 月に撮影された雌個体のハクビシンの映像については，物理科の川端拓信氏よりご提供頂いた。施設課の上田光代氏には構内でのハクビシンの駆除の記録について，また，いつも声を掛けて下さる学園守衛室の皆さんからは学内のハクビシンの目撃情報をご提供頂き，本調査に多大な協力を賜った。

本報告の文章構成および表現の整理にあたり，OpenAI の提供する言語モデル「ChatGPT」を参考として使用した。最終的な内容および責任は筆者に帰属する。

引用文献

- 古谷益朗．2009．ハクビシン・アライグマ—おもしろい生態とかしこい防ぎ方—．農山漁村文化協会，東京．106p.
- 飯島昌弘・斎藤昌幸・白井亮久．2018．武蔵学園に生息するタヌキの外食率を探る—東京都区部の狭い孤立林内の二つのため糞から出現した種子と人工物に着目して—．武蔵高等学校中学校紀要 3: 57–80.
- 岩間正和・金子弥生．2019．東京都区部におけるハクビシンによる被害件数の推移と被害内容．フィールドサイエンス 17: 1–8.
- 金井郁夫．1989．東京都のハクビシン進出史．東京都の自然 15: 1–10.
- 増田隆一．2024．ハクビシンの不思議．東京大学出版会，東京．144p.
- 野上達也．2022．自動撮影カメラで確認された金沢市夕日寺健民自然園のハクビシン．石川県白山自然保護センター研究報告 48: 47–50.
- 白井亮久．2017．武蔵学園構内におけるホンダタヌキの生息状況～“守衛さん”の巡回による目撃情報と痕跡調査に基づく 2016 年度の記録と過去の聞き取り調査～．武蔵高等学校中学校紀要 2: 33–80.
- 白井亮久．2018．武蔵学園構内で確認された疥癬タヌキと 2017～2018 年のタヌキの生息状況．武蔵高等学校中学校紀要 3: 81–94.
- 白井亮久．2020．武蔵学園で 3 年ぶりに確認されたタヌキの繁殖とセンサーカメラで初めて撮影されたアライグマ．武蔵高等学校中学校紀要 4: 103–124.
- 白井亮久．2024．武蔵学園でトラップカメラにより初めて確認されたイタチとみられる小動物，および学園の哺乳類相．武蔵高等学校中学校紀要 8: 129–142.
- 豊田英人．2012．ハクビシンの繁殖特性に関する行動学的・生理学的研究．麻布大学博士号学位論文．52p.

付図. 武蔵ハクビシンマップ 2024 年度 ver.



Akihisa, SHIRAI (2025) Records of sightings and removals of masked palm civets at Musashi Academy Campus around 2024, including an adult with young civet in its mouth. The Musashi Bulletin 9: 91–102.

Abstract

In September 2024, a masked palm civet (*Paguma larvata*) carrying a juvenile in its mouth was observed in the daytime on the campus of Musashi Academy Campus in Nerima Ward, Tokyo. Multiple students and faculty members witnessed the event, and photo and video evidence was collected. This report documents the details of that sighting as well as related observations of civet behavior on campus. In addition, it summarizes the occurrence and removal of civets found inside campus buildings from 2016 to 2025, along with camera-trap recordings and visual sightings.